

<エッセイ>日文研の外国人研究員の思い出

| | |
|---------|---|
| 著者 | ソヨンボ ボルジギン・ルブサンジャボン |
| 雑誌名 | 日文研 |
| 巻 | 59 |
| ページ | 109-112 |
| 発行年 | 2017-05-21 |
| 特集号タイトル | 創立三十周年記念特集号 |
| URL | http://doi.org/10.15055/00006700 |

<エッセイ>日文研の外国人研究員の思い出

| | |
|---------|---|
| 著者 | ソヨンボ ボルジギン・ルブサンジャボン |
| 雑誌名 | 日文研 |
| 巻 | 59 |
| ページ | 109-112 |
| 発行年 | 2017-05-21 |
| 特集号タイトル | 創立三十周年記念特集号 |
| URL | http://doi.org/10.15055/00006700 |

日文研の外国人研究員の思い出

ボルジギン・ルブサンジャボン・ソヨンボ

二〇一一年半ば、日文研に研究計画を送ったときは、どんな結果がくるのか楽しみでもありませんでした。もし落ちたら、という不安ももちろんありました。京都へ行って「シャーマニズムと神道―モンゴルと日本のふたつの土着宗教」の研究をやりたいという強い気持ちと裏表でした。文化人類学者としてふたつの国のふたつの宗教の比較研究をしたいと思いました。神道についてはチェコのプラハ・カレル大学へ留学したときに少し学んだことがあります。

首を長くして待ちわびた末、二〇一一年秋に日文研研究部より、私を二〇一二年四月一日より二〇一三年三月三十一日まで外国人研究員として受け入れるというメールが届きました。そのメールによれば、私の計画は「モンゴルのシャーマニズムと日本の神道・伝統的宗教信仰及び実践の比較研究」と少し変更してありましたが、これは本当に私を幸せにしてくれました。生涯最高のなかの最高のニュースといってもよいでしょう。そのメールを受けた日のことを思うと今でも幸せになります。私はモンゴル初の外国人研究員として選ばれたことでした。

その一方でまったく新しい生活環境のことを思うと不安が高まりました。何もかもが私には初めてなのです。そのうえ日本の食も習慣も伝統も知りません。不行儀なことをうっかりしてしまっただらと思うと不安でなりません。日本の生活スタイルも言葉も知りません。カルチャー・ショックで苦しむんじゃないかという心配がずっとつきまといましたが、英語が辛い

にも生活のコミュニケーションでも研究でも非常に有効でした。

「外国人研究員のためのガイド」という小冊子が出発前に送られ、不明な点がはつきりしてとても役に立ちました。海外研究交流室の琴浦香代子さんと研究協力課の西山明美さんがいろいろと説明してくださり、とりわけ親切にしてくださいました。今も二人のことを大きな感謝の念とともに思い出します。京都に着くや、日文研が優れた研究所で世界中の研究者の受入経験が豊かな場所であることがわかりました。到着するや研究と生活に必要なことがすべて整っていました。仕事も研究の環境にも満足し、仕事と生活どちらにとっても快適でした。

朝九時から夜遅くまで精いっぱい研究につとめました。モンゴル人には珍しい動物を二種類見たのは面白い思い出です。研究室からハウスに昼食のためにもどると一匹の子ザルがそこにいました。同じ日の夜一〇時半ごろには北の道を森の方へ一頭の鹿が走り去るのを見かけました。そんな光景にもすぐに慣れました。図書館とそのサービスは最高の質でした。日文研の仲間に加わるといことは、非常に友好的で国際的な研究者チームに加わることでした。

京都の研究時間は私の人生にとって黄金の時間だったと言わなくてはなりません。京都の間は私だけでなく、一緒に来訪した夫と五歳になる孫の男の子にも素敵な思い出を残してくれました。孫は、京都や大阪にある動物園、水族館ほか子ども好きな場所に連れていきましたので、京都、日本、日文研をとても気に入りました。特に新幹線の旅が大好きでした。

滞在中には京都、奈良、東京の主要な神社を訪問し、宮司に神道関連の質問をして疑問を質したり祭祀を見学しました。ジョン・ドウギル（立命館大学）、マイケル・ワチュカ（同志社大学）、岩橋さん（神社本庁）、今泉さん（明治神宮）、乾さん（上加茂神社）にはシャーマニズムと神道の比較研究を深めるにあたってとても助けて下さいました。この有名な神道研究者

や宮司はいずれも私の担当となったジョン・グリーン教授より紹介を受けました。

神社の祭に参加し観察することは研究の重要な一部分でした。坂本の山王祭を皮切りに多くの祭を見ました。八坂神社の祇園祭ではとても有名ですが、巡行の前日に屋台を組み立てるのを見に行きました。一〇月に開かれる時代祭では御所の前に私と夫は席を取りました。大阪で七月に開かれる天神祭では花火に特に驚きました。三月の東大寺・お松明では巨大な松明が群集の頭上を移動するのに昂奮させられました。八月京都の五山送り火、伏見稲荷大社の祭も見物しました。それ以外でも京都の歴史名所をあちこち訪れました。御所、金閣寺と銀閣寺、二条城、清水寺、平安神宮、東寺、天竜寺の庭園、嵐山などです。二〇一三年の新年は有名な八坂神社に真ん中の息子、義理の娘を連れて行き日本の友人と一緒に祝ったのをつねに楽しい思い出としています。

他の女性と同じように買い物が好きですから、空いた時間には高島屋によく行きました。モングルの男性は格闘技が非常に好きですが、ご多聞に漏れず夫も相撲のテレビ放映にくぎ付けでした。一五日間毎日テレビに夢中でした。二〇一三年一月、私たち夫婦と孫は新幹線で東京に行き、国技館で初場所を見物しました。私たちの古い友人で日本駐在モングル大使のクルルバートル氏が招待してくれたのです。横綱白鵬がその場所は優勝しました。私たちは皇室席の近くでしたが、その日には皇族はお出ましではありませんでした。取り組みを非常に楽しみ、売店で夫は力士の写真のついたカップをいくつか買いました。間違っていないければ好きな力士は大関魁皇と関脇安美錦だったと思います。

日文研滞在中に二本の論文をまとめました。ひとつは“A Survey of Japanese Studies in Mongolia: Focusing on Choji. Lubsangjab University of Language and Civilization”と『世界の日本研究 2014

『日本研究の隆盛』に収録されています。第二の論文は日文研での研究の主要な結果で「シャーマニズムと神道―モンゴルと日本の土着宗教の比較」と題されていますが、まだ日本語では出版されていません。

滞在中には日本の伝統文化遺産や生活様式に近づく機会を得ました。自分の目でどれほど日本人が伝統と文化を愛しているか、伝統的習慣を喜んでいるか、祖先より伝えられた習慣や行儀を誇り、国民の習慣に敬意を抱いているかを確かめました。その日本人の性格を心より讚えます。研究の中心だった神道の祭礼と高山の岩信仰など自然崇拜を比較する論文を構想しています。いつかその調査が認められることを心から待ち望んでいます。

一年間の研究生活の結果、以前にはわからなかった多くの不明な点が明らかになりました。共同の研究者や新しい日本の友人に心よりの感謝を申し上げます。友人のなかには私たち家族を家に招待して日本食をふるまい、有名な味噌汁や寿司の作り方を教えてくれた人もいました。そういう日本料理は作れるようになりました。最後まで外国人としてどうしても覚えられなかったのは、正しい角度でお辞儀をすることです。日本人はいともたやすくやるわけですが、何百回やっても私はうまくできませんでした。きっと私の体はかたくてきちんと曲げられないのだと思います。日本人は体が柔らかくてお辞儀ができるのです。私は友人を真似て最善を尽くすようにしましょう。そのチャンスがもう一度来るのを心から待ち望んでいます。

(国際日本文化研究センター元外国人研究員)

原文・英語

翻訳・細川周平 (国際日本文化研究センター教授)